

成人教育についての一考察

宮 脇 陽 三

内容目次

- 一、成人の置かれている現状
- 二、成人教育の特性
- 三、成人期の発達課題
- 四、成人教育の形態
- 五、成人教育の課題

一 成人の置かれている現状

科学技術の革新、都市化、情報化社会の発達などに伴う社会生活の急激な変化は、個人の側からの効果的な適応を不断に求めている。しかるに、これまでの学校教育だけでは、もはや今日の成人にとって必要な学習経験を十分に提供することができなくなってきた。それゆえ学習はすべての人にとって生涯にわたって継続されなければならなくなり、組織的で意図的な生涯学習が必要となってきたのである。

もちろん、社会生活全般の急激な変化に伴って起きてきた、これらの社会問題は教育のみによって処理できるものではないが、教育が社会における進歩的な変化と提携して進んで行くならば、現代の社会問題の解決に対して重大な功績を行なうことができるのである。

(一) 科学技術の変化

科学技術の変化は運輸、通信、農業、医学など、あらゆる科学の領域でみられる。それは消費財の効用や需要、その生産と流通の組織に変化をもたらした。自動制御装置による工業の変化、電子計算機による医学的診断の発達、太陽熱利用による工業技術の発達など、ライト兄弟による飛行機の発明から、今日の超音速ジェット旅客機による太平洋横断飛行までの科学技術の変化を、十九世紀の人びとは、はたして予測できたであろうか。

新しい科学技術を駆使するためには、それとかわりのある成人は、たえず学習する必要がある。また新しい産業構造の変化、新しい設備投資による作業現場の拡大と拡散によって、人口移動が著しく増大している。新しい居住地へ移動した住民が、その地域なり職場に適応するのを援助したり、地域社会や国家の政治への参加の増大に応じて、公民としての資質の向上をはかるための成人教育はますます必要となってきた。また科学技術の革新によって、仕事から解放された人びとの増加や、余暇時間の増大に伴って、余暇の活用の仕方についての学習も必要となってきた。

職業生活においても、一方では新しい仕事が登場し、他方では、これまでの仕事が老朽化してきている。農村でも手仕事による労働はすたれたものとなり、工業での雇用の必要が増加している。専門職業でも知識や技能は急速に変化しており、これまでのものは時代遅れの旧式なものになってしまっている。大学工学部で習得した知識や技能も、卒業後五年もたてば老朽化し、役に立たなくなっている。学校教育期間の教育だけでは、「生涯にわたって

役に立つ職業技術を習得させることはできなくなってしまった」（一、六）のである。このような科学技術の急激な変化の結果、これまでの技能や手による熟練は老朽化し、成人は転職したり、新しい職種への再教育が必要となってきた。

さらに科学技術の革新によって、大量生産の工程を日常化している生産現場は、自己の存続のために、人びとの購買欲求を創りだす大衆操作を盛んに展開している。そうした資本の論理にふりまわされることのない、賢明な消費者を育成する必要も増してきている。商品がつぎつぎに開発されてくるために、それに対応する形で消費者教育がますます必要となってきたのである。

（二）社会・文化の変化

科学技術の変化は家庭の役割や、その他の社会・文化の変化にも関係している。これまで家庭は価値観、道徳、社会的態度などについての有力な教育の場であったが、工業技術の発達した資本主義社会では、その教育的影響力はだんだんと低下している。家庭の役割は都市化の増大、技術の発達、文明生活の複雑化の増大に伴って変化した。このような家庭の役割の変化に伴う家庭教育の立てなおしをはかるための成人教育が必要になってきている。

仕事と社会関係の変化があまりにも急激であるために、成人は生活環境との相互作用に意味を見出せなくなってきたというし、自分自身がいたい何者であり、世界においてどこに位置しているのかについても、自信を失ってしまっている。不安、不確実性、疎外感などによって、現代の成人は個性的な自己実現が困難になっている。複雑な科学技術を駆使するために、高度で緻密な知的精神の集中を強いられる労働作業は、感情や情緒を表現する表出的過程の減少をもたらしている。

科学技術の変化と都市化の増大によって、「精神的、審美的価値を犠牲とした物質的価値の増大」（一、六）が

みられる。現代の成人生活は、だんだんと感情的な、審美的な要求を満たすことができなくなり、そのことが成人として人間でないようにしか感じられない状態におとしいれられる危機に見舞われている。現代社会はいまや「精神的に不毛な砂漠」(一、六)と化するおそれが出てきている。

成人の相互関係、職業、仲間集団のような社会集団の構造も変化してきている。労働者は作業現場での仲間の減少、仲間との共同生活者としての連帯感情から疎遠になっている。都市化の発達によって、大都市の住民は相互の精神的、感情的な接触が少なくなり、一人ひとりがばらばらの、原子化された存在、つまりリースマン(Riesmann, R 一九〇九)のいう「孤独な群集」と化している。家族もまた社会生活や倫理的、文化的価値観の第一次的な源泉としては弱体化してきている。かくして人格への尊敬、信頼、親密な相互依存にもとづいた複雑な人間関係の網目状組織はだんだんとほころびかけてきている。それに代って、人間同士の間の反目や不安や恐怖心や敵意がはびこるようになってきているのである。

都市化や商品の大量生産によって成人はますます「人工的な生活環境」(一、七)のなかで生活するようになってきている。このような生活環境はこわれやすく、脆弱性をもっており、複雑な機械の正常な運転や、エネルギーや物質の供給体系、再生不可能なエネルギーや物資の莫大な消費、それに伴う大量の廃棄物など、生態系の悪循環をもたらすおそれのある社会組織に依存しているのである。

このような社会・文化の葛藤や公害などを含む社会病理現象など、現代の人間社会の崩壊をもたらすおそれのある問題の解決に取り組む態度と、それを可能にする知識・技術の修得をはかるために、成人教育は今日ますます必要となってきた。

二 成人教育の特性

成人教育 (adult education) とは、一般に学校教育を修了した人間を対象として行なわれる教育および成人みずから (自発的集団も含む) が行なう学習活動の総称である。わが国では、成人教育の名称は一般化しておらず、明治以降の通俗教育、大欠中期以来今日にいたる公用語としての社会教育がほぼこれに相当する名称として用いられている。したがって成人教育の用語は、一般には社会教育の下位概念として用いられている。一九四七年に教育基本法が公布されて、その第七条に社会教育に関する規定がみられ、ついで一九四九年の社会教育法第2条において社会教育の定義が、次のように規定されている。

この法律で「社会教育」とは学校教育法に基づき、学校の教育課程として行なわれる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行なわれる組織的な教育活動 (体育及びレクリエーションを含む) というところである。この小論では、学校教育を修了した青年および成人を対象とした狭義の社会教育を成人教育と呼ぶことにし、主として老人を除く成人男性を対象とした社会教育を中心として取りあげることにする。

成人教育の対象は、すでに正規の学校教育を修了した成人であるから、その教育活動は直接間接に職業にかかわりあいをもっている。成人の生活活動は、住民としての公民生活、職業人としての職業生活を中心に営まれている。それゆえ成人教育は次のような特性をもつのである。

(一) 自発性 成人相手の成人教育では、学習者が要求しているものが得られないと、学習の場へやって来なくなる。だから成人教育の指導者は学習者の反応に敏感にならざるをえない。成人教育は成人の自覚にもとづいて始められ、学習目標の設定、内容、方法の選定に学習者自身の学習要求が大幅に反映されることになる。もちろん指導者の指

導助言が学習目標の設定や学習計画の作成などに与えられるが、原則的には主婦やサラリーマン、商店主など学習者の自発的な学習要求にもとづいて、その自主的な計画設定において営まれることになる。つまり成人自身がみずから教育され、みずから学習するという「自己学習」(一、一二)、または自分自身で学習目標を設定して、それを学習活動を通じて追求していく「自己管理学習」(一、一二)ということになる。

(二) **現実性** 成人はすべてある一定の職業に従事し、現実の社会生活に従事している。ここから自己の職場に直結した現実的な学習要求が起ってくる。成人の現実の社会経験が、学習の目標、内容、方法のなかに具体的に生かされることになる。成人は毎日の生活のなかで解決を迫られている問題に、みんなで取り組むことを望んでおり、そのような実践の関心に応じるものでなければならない。

(三) **非基準性** 成人教育がそれぞれの成人の置かれている特定の生活状況に即して編成される限り、学校教育における「学習指導要領」のような基準を設定することはできない。しかしながら同じ職業や生活環境に置かれている成人の間には、同じ学習要求が自然に発生してくるから、ある程度の学習を組織化することができるのである。

(四) **非体系性** 成人は既成の学問体系の知識を体系的に理解することには関心をもっていない。成人が知りたいのは、自分の現在の仕事、現在の置かれた位置、その現代における意味、また現在の時点においてまだ解決されていない問題を克服するための具体的な手だてである。つねに新しく起ってくる問題解決に挑戦する成人教育では、解決策が前もってはっきりしていて、そこに到達すればよいというものではありえない。現実の生活のなかで浮び上ってきた問題を解決するために、学習が展開されるのである。したがって成人教育は学習したことを実際に応用するための実践的な教育なのである。

(四) **対等性** 成人は自分の専門の職業については、指導者よりもよく知っている。それゆえ指導者と学習者の関係

は、対等なもの同士の「対話」でなければならない。つまり指導者も学習者から同じくらい教えられることになる。成人教育での学習のねらいは、知識を獲得する過程の習得にある。指導者は学習を可能にさせるだけでなく、学習を奨励し、案内する経験の組織化を通じて、学習を刺激することに効果的でなければならない。「知識仲介者」(一、三二)としての指導者の仕事は、学習者に興味を起させ、学習資料に接触させることである。指導者とは学習助言者であり、知識への案内者であり、学習活動の調整者である。学習助言者であり指揮者としての指導者は、学習者のなかに学習活動を鼓舞激励し、行動化させていくのである。

指導者の役割は学習者の進歩を計画し案内し評価することである。これは各学習者に固有の能力、傾向、動機、欲求、要求に応じた個別的な学習指導を行なうことになる。成人教育の目的は成人のなかに、「生涯学習への意欲を点火する」(一、三二)ことにある。成人教育指導者には、成人に学習目標を設定させ、計画を立案させ、実行させて、その結果を自ら評価できるようにさせる能力が必要である。成人教育指導者(animator)は成人との共同学習者として活動し、協働的学習、相互学習、相互生産的学習を促進するのである。

三 成人期の発達課題

成人期は青少年期において急速に獲得された基礎的な技術と能力を十分に強化し開発することによって、多くの新しい技術と能力を習得する時期である。この成人期は成人前期(壮年期)と成人中期(中年期)と成人後期(老年期)とに分けられる。このような区分は、一般に人間の生物学的および心理的な成熟の段階に応じたものであるとともに、また人間の社会的文化的な成熟にも対応したものである。ハヴィガースト(Havighurst, R. J. 一九〇〇―)は人生の各時期には固有の成長発達のための課題が生じ、それを達成すれば人間は幸福になり、その後の課題

にも成功するが、失敗すれば不幸になり、社会で認められず、その後の課題の達成も困難になるとして、このような各時期の課題を「発達課題」(developmental task)」(九、二二)とよんでいる。

彼は成人前期と中年期の課題として、次のような項目をあげている。

(一)成人前期(一八歳から三〇歳) ①配偶者を選ぶこと、②配偶者との生活を学ぶこと、③第一子を家族に加えること、④子供を育てること、⑤家庭を管理すること、⑥職業につくこと、⑦市民的责任を負うこと、⑧適した社会集団を見つけること。

(二)中年期(三〇歳から五五歳) ①市民的社会的责任を担うこと、②一定の経済生活水準を築き、維持すること、③十代の子供たちが信頼できる成人に成長していくよう援助すること、④余暇活動を充実すること、⑤老年の両親に適應すること。

これらは万人に共通な普遍的な発達課題だから、ごくゆるやかな課題である。さまざまな職業や階層の人びとに共通する発達課題であるから、各年齢段階で共通な生活課題がとりあげられているのである。

ホセ・オルテガ・イ・ガセット(Otega y Gasset, J. 一八八三—一九五五)によれば、成人世代(三〇歳から四五歳)は壮年世代(四五歳から六〇歳)の英知を受け、独自の權威を主張し始め、穏やかにあるいは急激に新しい考え方と目標を産み出すことが課題である。壮年世代は年長者としての統率力や權威に満足感を味わうとともに、その考え方や目標を社会のあらゆる部門において支配的なものにし、その目標達成に専心することが課題である。

エリクソン(Erikson, E. H. 一九〇二—)によれば、発達の第六段階の「親密性対孤独性」は二〇歳台に、続く第七段階の「生産性対停滞性」は四〇歳頃に起るといわれている。生産性とは新しい世代の子孫を産み出すという意味をもっている。しかし子供の父親であるのは成人前期の役割であり、四〇歳以後の中年期には、新しい世代

の大人に対して責任を負うという役割をになう。父としての權威を失わずに若い成人と対等な関係を築く新しい生き方を見つけることが課題である。

どの発達段階にあっても、発達するということは相反する二つの生き方をうまく融和させてひとつにする過程といえる。生産力をもつには停滞する、つまり成長せず、義務にしばられ、自我の実現などまったくない人生にはまりこんで動きがとれないと感じるとはどういう気持なのかを知らなければならぬ。停滞を体験し、停滞に耐え、停滞と戦う力というのは、中年期に生産を求める努力につきものの一面である。停滞は中年期を通じて発達上必要な役割を果たす。自分の弱さを認識することが、他者への分別、共感、同感を産む源となる。自分の弱さと脆さを自覚することで自分と他者を同一視できる場合に限り、他者の苦しみをほんとうに理解できるのである。

人間は四〇歳にして人生の転換期を迎える。四〇歳前後の男性はたんに外的状況に反応しているだけでなく、自分の人生を見なおすのである。これまでとってきた方向、若い頃の夢の行く末、将来の人生の可能性などについて考えることが課題となる。

ユング(Jung, C. G. 一八七五—一九六二)も、人生を前半と後半に分けて、四〇歳前後をその分かれ目の時期としている。四〇歳前後に個性化の復活が始まり、その後ずっと続くというのである。この個性化とは、人のもとと個性的になる発達過程をいっている。明確に自我同一性を身につけるにつれて、自分の内面的資質を活用し、自分の目的を追求できるようになる。この個性化によって、社会がわたくしたちにする要求と、無意識に抑制しているわれわれ自身の要求のもつ押しつけがましさを抑えることができるようになる。つまりユングのいう「元型無意識」(自己定義と満足感の内面的な源)に注意を向けはじめることができるようになる。この元型とは、いわば自己の内部にある種子の宝庫である。これらの種子は成人前期には休眠しているが、中年期の個性化過程で、栄養

を与えて育て、自分の生活の中でもっと価値ある場を与えるにつれて、自分の生活を発展させ豊かにしてくれる。個性は辛い過渡期をとめない、挫折をくり返すが、たえず自己を回復し、自分自身や他人の生活へ創造的にかかわっていく可能性をもっている。

レビンソン (Levinson, D. J.) は「成人前期と中年期の発達課題」(一二、八九〜九八)として、次のようなものをあげている。

(一) 成人前期 (一七歳から四五歳)

① 成人への過渡期 (一七歳から二二歳)

未成年時代に終わりを告げることと成人前期を出発させることが、この時期の発達課題である。第一の課題は、未成年時代の世界の本質と自分達の置かれていた位置に疑問を抱き、その時の自分にとって重要な人物、集団、制度などの関係を修正するか終わらせ、未成年時代の世界で形成した自己を見直して修正することである。第二の課題は、成人の世界への第一歩を踏み出すことである。成人の世界の可能性を模索し、その一員としての自分を想像し、成人としての最初の自我同一性を確立し、成人の生活のための暫定的選択をして、それを試みてみる。成人の世界で生活を築きはじめた時に、この過渡期は終わる。

② 成人の世界へ入る時期 (二二歳から二八歳) この時期の発達課題は大切な自己と成人の社会との間をつなぐ働きをする仮の生活構造を形づくることである。自分の本拠をもった新成人として成人の仲間入りをしなければならぬ。職業、女性との交際と結婚と子供の養育、仲間との交際、価値観、生活様式などについて、はじめての選択をいろいろと試みることになる。

③ 三〇歳の過渡期 (二二歳から三三歳)

この時期は成人期に入って最初に築いた生活構造のもつ欠陥と限界

を解決し、成人前期を全うするための満足のゆく生活を築く土台をつくりあげる機会を与える。この時期の始めと終りでは、すべての人の生涯構造が変化する。この時期での選択が自分の夢や才能や外面的可能性と一致すれば、比較的満足のゆく生活を築く土台となる。

④ 一家を構える時期（三三歳から四〇歳） この時期には、生活構造の中心となる要素（仕事、家族、友人、余暇、地域社会など）に全力を注ぎ、若い時の野心や目標を実現しようとする。この時期の発達課題は二つある。その一は社会に自分の適所を確立することである。生活のいかりを降ろし、自分の選んだ職業で能力を伸ばし、職場、その他で高く評価される一員になろうとする。その二は、成功をめざして努力することである。自己の属する世界で一人前の成人になることが課題である。自分なりの人生設計を決定し、向上の階段、つまりあらゆる面での栄達、社会的地位、収入、権力、名声、創造性、家庭生活の質、社会的貢献度などが上ることを明確に意識するようになる。目指すところは自分の人生設計にそって昇進し、階段を登って、その世界で上位の成員になることである。

三六歳から四〇歳にかけて、「一本立ちする時期」が訪れる。この時期の課題は、「一家を構える時期」に立てた人生設計の目標を達成し、自分の属する世界で先輩になり、自分の意志で意見を述べ、大きな権威をもつことである。この時期はその人の人生の運命を決する時である。実績をつくり、出世の階段を登りきることが、成人の男性として一人前になっているというしるしである。

(二) 中年期（四〇歳から六〇歳）

体力や気力はいくぶんおとろえはするが、まだはたらつと充実した生活を送れるくらいのゆとりは残っている。この時期は英知、分別、寛容、感情に左右されない同情心、思慮深さ、もののあわれの感覚といった資質が円熟す

る季節である。人がその人生の目標を達成したり、社会的に貢献したりする時期である。

① 人生半ばの過渡期（四〇歳から四五歳） この時期は成人前期と中年期をつなぐ橋となる。それまでの生活構造に再び疑問を抱くようになる。「自分のために、または他人のためにほんとうに欲しているのは何か」と問うことが課題となる。自分の実際の欲望、価値観、才能、野心を発揮できるような生活を切望するようになる。自己がこれまで無視してきた面を発揮し、現在の生活を修正しようとする。

② 中年に入る時期（四五歳から五〇歳） この時期には新しい選択を行なって、新しい生活構造をつくりあげることが課題である。四〇歳代後半に現われる生活は、その満足度、すなわち自己に適しているか、外界では適度に効果的に機能するかという点で違いがある。独自の満足感や達成感をもつ中年期を出発させた者にとっては、中年期はもっとも充実した創造的な季節である。

③ 五〇歳の過渡期（五〇歳から五五歳） この時期には、「人生半ばの過渡期」の課題をさらに実行し、四〇歳代半ばにつくりあげた生活を修正することができる。

④ 中年の最盛期（五五歳から六〇歳） この中年期の安定期には、もっぱら中年期第二の生活構造を築きあげることが課題である。これが中年期を完結する力となる。自己を若返らせ、生活を豊かにできる男性は、五〇歳代の一〇年間の大いなる成就の時にできるのである。

⑤ 老年への過渡期（六〇歳から六五歳） この時期には中年期が終わり、老年期に入るための土台が築かれる。この時期の課題は、中年期の奮闘に終わりを告げ、来たるべき老年期を迎える準備をすることである。成人の発達上重要な時期であり、生活周期における重要な転換期となる。

成人教育とは成人前期と中年期の発達課題の達成を援助することであり、したがって人間教育は生涯にわたって

必要となる。ここでは各発達課題は一般的に表現されているが、これらは時代的条件や地域社会の条件のもとで具体的な生活にかかわる課題として現われるものであり、成人における発達課題の学習とは、そのような具体的な問題解決のための学習内容と学習方法を中心として展開されなければならないのである。

四 成人教育の形態

(一) 民間有志団体型

岐阜県大野郡滝見村の「オーク・ヴィレッジ」は、たんす、机など手づくり家具の製作に取り組む一〇人程度の学習集団の名称であり、学習者の住んでいる地域の通称でもある。大量生産をめざす機械技術の発達した日本では、物づくりについて材料選び、製作、加工、仕上げまでの一貫作業を教えてくれるところはない。参考書もない。そこでこの集団内の指導者格の人が、まず自力で開発した。その成果をみんなのものにすることが必要になった。昔の職人は一人ひとりが名人芸をもっていた。しかしその技術は後世に伝えていないし、意図もなかった。そのため現代社会では自らの存在の基盤を失った。このような反省から、この集団の輪講が始まった。

輪講とは仲間の一〇人が交代で講師になって開く学習会である。コロキウムともよばれる。講師によつては二時間近くの独演のあと、自由討論に入ることもある。輪講は週一回で月曜日の夜七時から一〇時までである。午後七時に一〇人が夕食を終えて、会員宅に集合し、窓際に黒板を立てかけて学習会を始める。会員は床に車座になってすわる。当番の講師は、最近手がけた「歯科医院の新築内装工事の方法について」、事前に配付した発表要旨にもとづいて話を進める。生活と仕事と学習が一体化しているから、どう思ふかということよりも、日常生活に必要であつて中身の面白いものを大切と考えられている。このオーク・ヴィレッジの学習方法の基本は相互学習、相互教

育である。

(二) 情報文化事業型

「朝日カルチャーセンター」(八、二一〇)は、昭和四九年四月に朝日新聞の文化事業として始められた。これはすべての成人を対象として、自己開発の場と機会を提供するために開設された。最近のわが国では生活周期が急激に変化し始めているので、変容するそれぞれの人間の生活段階にあわせて、人間の幸福を追求するための教養科目や、生活に必要でしかも将来に役立つ生活文化の実践的な技術科目の講座が用意されている。例えば法律・経済コースでは「妻と夫の法律」(一年)、「今後の景気政策と国際金融」(三カ月)など六科目がある。

(三) 企業内成人学校型

松下電産の「松下商学院」では、一八歳から二六歳までの家電製品小売店の跡取り息子を一年間預って、全寮制で鍛えている。毎朝六時に起床し、二キロメートルのマラソンをやった後に朝食をとる。四書五経の精神を叩きこまれ、柔道、剣道は全員の必修である。電気工事の実際、無線技術、会計、経理監査、接客、商品知識、販売店実習などを履修し、家電製品小売店主としてやっていけるだけの実力を養成している。

(四) 公共的施設型

①公民館 滋賀県水口町の中央公民館は町民のねがいとして、⑦なにかをまなぼうとする人の輪が大きくなるように、⑧人の悲しみに心をいためる人が多くなるように、⑨だれもがこへ来て住みたくなるような町ができるように、⑩の三つをあげている。また重点目標として、⑪文化・体育活動の推進、⑫地域連帯感の高揚、⑬分館設置の促進と活動の協調と提けいがあげられ、町民が互いにくりかえしのきかない人生を意義あらしめようと呼びかけている。

事業としては親子ソフトボール大会、市民バレーボール大会、親子早朝登山、水泳大会、史跡めぐり、市民ハイキング、漬物講習会、市民サッカー大会、スキー教室などがある。成人学級講座には、夏季大学（学校教育の問題を考える、生きがいの諸問題など）、家庭教育学級（折り紙の仕方、幼児の病気と対応策など）、郷土学級（文化財・史跡探訪、水口方言の調査研究と製本・出版、家訓の収集調査と製本・出版）など六コースがある。成人教室は書道、和裁、洋裁、編物、華道、料理、フランス刺繍、簿記、短歌、日本画、謡曲、園芸の一六教室があり、毎月一回から八回まで開講されている。学習グループには作陶、染色、短歌、読書、詩吟、将棋、手話、人形劇、演劇、吹奏楽、新生活学校、テニス、空手、俳句の一六グループがあり、毎月一回から四回まで開講されている。これらの成人学級は成人の一般的教養および職業的知識・技能を高めることをねらいとしている。また成人学校は昭和二十四年九月に神奈川県教育委員会と川崎市の共催で始められたが、今日では全国的に大都市を中心として普及している。

②PTA（学校育友会）これは児童生徒の健全な成長をはかることを目的とし、親と教師とが協力して、学校および家庭における教育に関し、理解を深め、その教育の振興につとめ、さらに児童生徒の校外における生活の指導、地域における教育環境の改善と充実をはかるため会員相互の学習そのほか必要な活動をおこなう団体である。

京都市安祥寺中学校育友会の場合には、事務所を学校内に置いており、育友会の目的を達成するために、①講演会、講習会、社会見学、新聞発行を行なうこと、②生徒の学習意欲を高め、適切な指導を行なうために常に学校と連絡を密にし、協議会、学年別懇談会などを開くこと、③生徒の福祉を推進するための諸般の事業を行なうことになっている。なお会員は学校在籍する生徒の両親またはこれにかわる保護者および学校教職員に限られている。

昭和五四年度では、講演会は「中学生の心理と親の役割」、社会見学は大河内山荘、家庭教育学級ではNHK

「中学生日記」のVTR座談会、私立高校見学、ルノアール展作品解説・鑑賞会などが行なわれている。

③放送講座 広島県呉市の「放送アカデミー」では、NHK教育テレビの大学講座の「心理学」を教材に大学教師を講師に迎えて、月一回のスクーリングを行なっている。教育センターのVTRを活用して、あらかじめ収録された番組が二台の受像機に映される。約三〇分の放送が終わると、中央の机が引き離され、向かい合って座れる形が作られる。先輩格の人が司会者となり、講師を助言者にしてテーマの話し合いが始まる。これらの放送講座が長続きするためには地域に根を張り、核となる人の育成が大切である。

(四) 大学公開講座型

大学が一般成人に門戸を開放して、最近の研究成果を発表する一方、一般教養を身につけさせる講義を行なっている。

①東北大学公開講座 これは「大学教育開放センター」の専任職員（教官三人、事務官一人）が担当している。同センターは大学の研究成果をひろく地域社会に開放することをめざし、大学開放の基礎的研究と各種事業を行うため、教育学部の付属施設として、昭和四八年に発足した。夜間講座が仙台市中央公民館で毎木曜日の夜六時か、八時まで開講されている。講座の題目には、「低成長下の経済」「電算機入門」「子供と教育」「医療保健問題」など、それにスポーツ教室も多く、地域の問題なども取りあげられている。

②立命館大学土曜講座 これは昭和二十一年三月に当時の末川博総長が「労働組合法について」講演して以来、三〇年以上にわたって続けられている。昭和五一年九月からは「土曜講座だより」を発行して、聴講者の声を紹介するとともに、講座の内容を解説している。題目は政治、経済、法律など各分野にわたっており、時事問題や市民生活になじみ深いものが選定されている。「原子力の平和利用」などの特集題目を設けたり、「資本論と現代」で連続講

義も行なっている。

(丙) 大学放送講座型

ラジオ、テレビの普及にともない、その番組視聴を学習活動の中核にすえ、個人学習（視聴）と集合学習（スクーリング）を組合わせることによって、成人の学習活動を継続的、系統的に日常化しようとするものである。

大阪大学は昭和五五年度から、ラジオ講座として「大阪の学問―懷徳堂・適塾―」、またテレビ講座として「病氣の原因をさぐる」を始めた。一般の視聴者のなかから各講座ごとに三百人の受講者を募集し、受講者にはテキストが実費頒布され、テープレコーダー、ビデオコーダー備付の再視聴センターを利用させるほか、講師と受講者、受講者同士のコミュニケーションを図るための面接授業（スクーリング）が一回、日曜日に二時間設けられている。面接授業では、講師が一連の講義のまとめをするとともに、学習内容について質疑応答を行なうことになっている。

(丁) 大学夜間教育型

明治大学では昭和五六年度から政経学部二部（夜間部）に社会人特別入試制度を設けることになった。勤労社会人を重視するため、資格は定時制、通信制高校卒業者、または大学入学資格検定合格者で二二歳以上の者などとなっている。試験科目は英語と作文の二科目であり、面接試験がある。

(戊) 大学通信教育型

昭和二二年に学校教育法に正規の大学教育の課程として制度化された。昭和二五年に正規の大学教育課程として法政大学、慶応義塾大学などの通信教育課程が認可され、大学教育としての通信教育制度が成立し、今日では小学校教諭免許取得課程も玉川大学や「仏教大学」（一三、八七～一二二）などに設けられている。

通信教育は通学の困難または不可能な者に、それぞれの地域にあって大学教育が受けられる制度である。講義に

代わる印刷教材の配付、学習経過に応ずる報告課題によるリポートの提出とその添削指導などのすべてが郵便による往復によっている。今日では郵便以外のラジオ、テレビ、オーディオ・テープ、ビデオ・テープなどの媒体の利用へと進みつつあり、「通信」とはこれらの媒体を総称して呼ぶようになっており、媒体教育とか広域教育 (distance education) とも呼ばれている。

この大学通信教育が社会教育の役割を担うのは当然であり、正規の課程としての入学や卒業の資格を問わずに、能力に応じて希望の教育課程の全部または一部の科目の履修の道も開かれている。

(ウ) 専修学校型

専門的な職業教育をめざす専修学校は昭和五十一年から制度化された。京都府では昭和五十一年の二校から五五年の五二校と伸びている。各種学校からの昇格衣がえが中心だが、単なる肩書だけの学歴志向ではなく、実質的な職業教育志向が強まっている。

教育内容では、洋・和裁、編み物など服飾関係、茶・華道など文化教養関係、看護婦、栄養士など衛生、医療関係が比較的に多いが、コンピューター、経理実務面もふえる傾向にある。教育課程としては、中卒を対象とする高等課程、高卒者以上の専門課程と、学歴に関係のない一般課程との三コースがあるが、専門課程では、コンピューター、経理、看護などが多い。

五 成人教育の課題

文部省は、昭和五五年七月に地方都市での生涯教育の現状についての調査結果を発表している。地方振興のための国土庁が指定した「モデル定住圏」から新潟県上越市、徳島県阿南市など五カ所を選び、各圏域ごとに一八歳以

上の住民一、六〇〇人を抽出、生涯学習の実態や希望を調べたところ、学習希望率は約六〇％、参加率は約五〇％に上り、関心の強さが裏付けられている。生きがいや教養を深めるために学ぶ人が大半を占め、資格取得といった実利的目的は少数派になっている。

また学習活動の希望者は五八・六三％と各圏域ともかなり高率である。実際に昭和五四年の一年間にスポーツ、趣味など何らかの学習活動をした人は五四・五六％に上り、二人に一人は学習経験者である。学習活動に参加しない理由の第一位は忙しくて時間がない（五六・六〇％）である。参加率の高いのはバレー、野球といった球技で、どの圏域でも第一位である。音楽、美術、茶・華道、和・洋裁、民俗芸能などが上位グループとなっている。

学習の目的は、「生きがいや楽しみのため」が六九・八五％で第一位である。「知識・教養のため」「芸能・趣味を身につけるため」も四〇・七一％と多い。これに対し「資格を取るため」「収入を上げるため」といった実利的目的は、一〇・二〇％程度で少数にとどまっている。

地域活動への参加は、祭りや運動会など、心の触れ合いを強める行事は九〇％に近い高率参加となっている。奉仕活動は大切だと思う人が七〇・八〇％もあるのに、実際の参加率は平均五七％である。

さらに二〇年後のわが国の生涯教育がどうなっているかについても、文部省は昭和五五年に財界、学識経験者などわが国の有識者約四〇〇人を対象としてまとめた未来予測調査を発表している。それによると成人（二五歳から四九歳）のための社会教育の重点内容は、成人男子の場合、将来の姿として第一位健康・体力（八六・七％）第二位職業技術（七二・二％）第三位知識・教養（七二・〇％）、またあるべき姿として第一位健康・体力（七九・四％）第二位知識・教養（六八・八％）第三位国際性（六七・八％）となっている。調査は予測より、あるべき姿が重点とみるべき内容であり、その実現のためには学校、社会、家庭の緊密な連携による努力が必要である。

①家庭の役割の増大 家庭の姿としては、三世代家族の割合や兄弟の数は現在と変わらないが、子供の人間形成に果たす家庭の役割はやや増えると七三％が見えており、八八％がかなり増えるべきだと答えている。さらにだんらんやスポーツを通じた家族の触れ合い、悩み事についての親子の話し合いなどもやや拡大すると予測されており、家庭に対する暇待は大きい。家庭でのしつけについては七五％が「かなり拡大しているべきだ」と答えているにもかかわらず、予測では現在と変わらないとする答えが多く、今後の成人教育の課題となっている。

②開かれた大学へ 学生時代だけでなく、社会人となっても、興味に応じて学習するという生涯教育の考え方については、ほぼ全員が定着していると予測している。聴講生制度の活用や、職業経験を入試の際に考慮することなどにより、大学学部を社会人に開放する工夫も今後の成人教育の課題とみられている。

③企業では実力重視 企業での学歴重視はやや弱まり、代わって実力重視がやや強まるとの予測が大勢を占めている。また企業内教育は拡大し、企業は労働者に積極的に学習する機会を与えるようになるとの見方が強く、八〇％以上がすでにスウェーデンで一九七五年以後に法制化されたような成人有給教育休暇制度の拡大を予測している。しかしこれらはあくまで願望的な予測で、その実現は容易とはいえない。多くの厳しい社会環境の変革が前提になるからである。

その第一は学歴社会の改革である。調査では実力主義がやや強まるとの予測が大勢を占めたというものの、現在の選別的な教育制度を変えるまでにはかなりの時間がかかるとみなければならぬ。学歴偏重の是正を急がなければ、成人教育の発展も実効的な効果をもちえないであろう。

第二には、生涯教育の基礎となる学習意欲や学習能力の指導の充実が望まれる。成人教育は強制力をもたない教育活動であるから、現代文化の発達に対応して学習すべき必要が増大してきているにもかかわらず、その参加者の

確保と増加はなかなか困難である。成人の大多数は勤労者であるから、学習のための時間と労力を生み出すことも多大の困難がともなう。したがって成人の学習意欲を促進することと、学習機会を拡大することを根本的に考えなければならない。

一般には、成人における学習要求の満足感情と学習効果実現への期待信念とが成人教育への高い参加を促進するといわれている。また成人の生活は仕事と余暇に大別されるが、現在の仕事における企画や業務遂行の方針決定などへの参加が高くなればなるほど、成人教育への参加も高くなる傾向がある。人間は自己の社会環境への影響力が強くなればなるほど、生活の経営・管理に関する知識を習得しようとする傾向が増大してくるのである。今後、成人の余暇時間がふえてきたとしても、それを有効に活用する仕方をも身につけていないと、かならずしも成人教育への参加がふえるとはかぎらないのである。

第三には、成人教育の学習計画や学習内容の編成の問題がある。成人の生活実態は千差万別である。その多様性をいかにして共通の学習計画や学習内容に反映させるかを実際に工夫していかなければならないのである。

参考文献

- (1) Croplay, A. J. & Dave, R.H., *Lifelong Education and the Training of Teachers*, 1978.
- (2) Bergsten, U., *Interest in Education among Adults with short previous formal Schooling*, "Adult Education, vol. 30", 1980.
- (3) R・J・ハーヴィーガースト、莊司雅子訳『人間の発達課題と教育』牧書店、一九五八年
- (4) 石堂豊『現代公民館経営論』御茶の水書房、一九六七年
- (5) 田代元弥、岡本包治編著『新社会教育論』第一法規出版、一九七二年
- (6) 石堂 豊編著『現代社会教育の回顧と展望』広島大学出版研究会、一九七四年

- (7) 村井 実、森昭、吉田昇編著『市民のための生涯教育』日本放送出版協会、一九七五年
 - (8) 辻 功編著『生涯教育の可能性』第一法規出版、一九七六年
 - (9) 岸本幸次郎編著『社会教育』福村出版、一九七七年
 - (10) 波多野完治『生涯教育論』小学館、一九八〇年
 - (11) ナンシー・メイヤー著、山崎武也訳『男性中年期』サイマル出版会、一九八〇年
 - (12) ダニエル・J・レビンソン著、南博訳『人生の四季 中年をいかに生きるか』講談社、一九八〇年
 - (13) 花田順信『わが国社会福祉事業教育と大学通信教育（Ⅰ）』（『仏教大学研究紀要第六四号』所収）、一九八〇年
- 【備考】文中の（ ）内の数字は文献番号と、文献の引用頁数を示す。